令和６年８月２１日（水）　陸奥新報【１面】

環境省レッドデータブック絶滅危惧Ⅱ類、本県で準絶滅危惧種指定

弘前に『ハナダカバチ』

みどり幼稚園　砂場で生息

みどり幼稚園の砂場で見つかったニッポンハナダカバチ（森井准教授提供）

森井　悠太准教授

江口　一馬さん

弘前大学農学生命科学部の森井悠太准教授(37)と、同大大学院農学生命科学研究科２年の江口一馬さん(24)が、環境省のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種）、本県でも準絶滅危惧種に指定されているハチの一種「ニッポンハナダカバチ」を弘前市のみどり幼稚園園庭で確認した。砂地を生息地とするハチで、園庭の砂場で生息していた。ハチを手でつかまえるなど過度に刺激しない限り、人には危害を与えないことや、飛ぶ数が少ないことなどから、園では巣をすぐには駆除とはせず、子どもたちと砂場を〝共有〟させている。

（西尾瑛）

弘大・森井准教授と大学院生の江口さん確認

同園では数年前からこの虫が確認されており、アブだと考えてその都度駆除などを行ってきた。ところが今年に入ってその数が急増したため、安全性の観点から園庭を閉鎖。一方で、アブやハチとは異なる見た目や、砂に穴を掘る姿などから、同園が知り合いの森井准教授に相談し確認してもらったところ、実は希少なニッポンハナダカバチであることが判明した。

ニッポンハナダカバチは、生息地の砂浜海岸や砂質の河川敷などの開発により大きく数を減らしているのが現状。県内では東通村、つがる市平滝沼、五所川原市十三湖、深浦町大間越、中泊町小泊などのほか、１９５０年代には岩木川でも見つかった記録が残る。

今回、森井准教授、江口さんと共に同園でニッポンハナダカバチの活動を観察したところ、園庭の砂場を利用して巣を作って繁殖しており、砂場は優れた生息環境となっていることが分かった。むやみに刺さないハチであることやその後飛ぶ数が急激に減り、現在では見掛けないほどになっていることから、同園ではすぐに巣の駆除という形は取らずに、現在は園庭を開放して園児も遊んでいる。

柴田洋子園長は「何においても子どもの安全が第一なので、今回はきちんと調べてもらって安全なハチであることから園庭を開放した。虫にも命があること、いことは大切にしていけたむやみやたらに駆除はしな ら」と話す。

森井准教授は「生物多様性と言われる中で、幼稚園のうちからいろいろな虫と仲良くできる取り組みをしていただけることは素晴らしい」とし、江口さんも「身の回りの生き物に気付いてくれて、専門の意見が必要だと頼ってくれたことはすごくありがたい」と話した。

この画像は，当該ページに限って”陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。